慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森喜一著 続日本労働者階級状態史
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.12 (1962. 12) ,p.1128(84)- 1129(85)
JaLC DOI	10.14991/001.19621201-0084
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19621201-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

森喜一著『続日本労働者階級状態史』

本書は、その題名をみてもわかるように、著者がさきに世に問うた力作、「日本労働者階級状態史」（三田学会雑誌、十一月号、拙稿新刊紹介を参照されたい）の続篇である。前者に劣らず老大な本書の内容は、敗戦後の労働者階級の状態を、豊富な資料を通じて、克明に描き出そうとしている。つぎのような諸章から成っている。

第一章敗戦直後の荒廃・インフレーションのなかの労働者階級（一九四五年～一九四八年）、第一節経済的・社会的崩壊とインフレーション、第二節戦後労働者数の推移と構成の諸変化、第三節労働条件と生活、第四節労働者組織の急展開、第五節労働争議の爆発的展開とその推移、第六節戦後労働政策の発足と変転、第二章占領政策下の経済再建過程と労働者階級（一九四九年～一九五一年）、第一節ドッジ・ライン実施～講和条約成立前後の経済情勢と独占資本、第二節労働者階級の数的推移と構成、第三節労働条件の変化、第四節デフレと特需下の労働者生活、第五節労働組合運動の後退と闘争、第六節社会党分裂と共産党弾圧、第七節労働立法に現われた労働政策反動化の強まり、第三章サンフランシスコ講和条約以後、合理化攻勢下の労働者階級（一九五二年～一九五四年）、第一節合理化・独占強化とデフレ恐慌、第二節労働力の量的推移と内容の変化、第三節合理化と労働条件の変化、第四節労働者の生活状態、第五節労働組合の立直り、第六節労働争議の増大と記録的大争議の頻発、第七節共産党の党内抗争激化と社会党の統一化、第四章技術革新・合理化の発展と労働者階級（一九五五年～一九六〇年）、第一節一九五五年以後の経済局面―設備投資と独占の発展、第二節労働者階級の増大と構成変化、第三節労働条件の変化と生活状態、第四節労働組合の推移と闘争の発展、あとがき。

本書の特徴は、ひとつは内容の広はんで多岐にわたっていることと、その説明の実証的なことである。そしていまひとつは、その時代区分についての問題である。内容そのものについては、文字通り、客観的な事実の集積を通じて労働者階級の状態を克明に描き出しているし、その意味では、資料的価値は大きいことはいうまでもない。しかし、読んでいて感ずることは、前者と同じように、客観的な資料を蒐集して、労働者階級の状態の推移を明らかにしていながら、やはり法則性の追求という点で、いささか欠けている点は指摘されねばならない。たとえば、われわれの体験からして忘れることのできないこの第二次世界大戦後の時期の苦しかった記憶は、本書を読むことによって、生々しく想い出されるのであるが、そうした事実の描写の点では、われわれに迫るものがあるにしても、「資料まけ」とでもいおうか、あまりにも実証性を重んじようとする努力が逆に、たんに事実の集積、いわゆる「事件史」的な印象をまぬがれることはできない。いうまでもなく、労働者階級の状態史の研究は、㈠労働者階級の組織状態やその推移および内部矛盾、㈡労働者の生活諸条件の変化、㈢労働者階級の前衛政党との相互関係などとともに、㈣資本の集中・集積の過程、㈤支配権力の対労働者政策の変遷、㈥そしてさらに国際政治の国内への影響などが問題とならなければならない。正しく著者はこうした視点に立ちながら、何もかも織りこもうと努力されているため、いかにも整理されていないという欠陥におちこむことになった。もちろん、これは、必ずしも著者の責任ではなく、戦後の時期が、ひとつの歴史的な時期として評価される段階にきていないためでもあるが、さきにのべたような諸条件を有機的に関連させていないうらみがある点にあると思う。

つぎに時期区分の問題であるが、著者は、第二章と第三章とをわける嶺として、一九五二年（昭和二七年）のサンフランシスコ条約をあげているが、これは要するに、朝鮮戦争を契機として独占資本の再編成がすすみ、労働者階級への攻撃が一段と強化されたという意味において画期をなすものと思われるが、しかしそういう意味においては一九五〇年の朝鮮動乱前後を中心とする労働者階級にたいする反動政策の方がむしろ重要で、戦後日本労働運動の転機をなすものと考えられるがどうであろうか。朝鮮戦争の、日本の資本主義および労働者階級にあたえた影響を、いま少し重視してもよいのではなかろうか。

以上、卒直な印象をのべたが、本書のもつ資料的価値は、労働者階級状態史とならんで、日本の労働運動史を研究する者にとって不可欠の業績となるものと確信する。労働運動史、経済史を専攻するすべての人々に本書を推奨するものである。（三一書房・A5・五四八頁・三〇〇〇円）

―飯田　鼎―

＊　＊　＊

国際経済学会編『世界経済と国際通貨』（国際経済第十三号）

本書は、六一年十月に富山大学で行なわれた国際経済学会第二十回大会における報告および論議をまとめたものである（それ以前の大会の成果も国際経済のこれ迄の各号に収められており、大いに参照さるべきものである）。本書の主要な特徴は、毎会その時の世界経済において最も重要と思われる共通論題が選ばれてそれに中心をおいて論究が行なわれていることと、学会においてこのテーマをめぐって行なわれた合同討論がそのまま収録されていることとであろう。

このことは、世界経済・国際経済においてそれぞれの時点で焦点とされ、もっとも各論者が関心を注いだ問題が何であり、その問題が学界において如何にとらえられ、未解決なあるいは究明さるべき点がどこにあるかを明示することになろう。しかし反面、世界経済